※小僧と狐

昔、あさひのふたまた、金峰山のはこめん、なすのがはらのおさんという三匹の狐がいた。三匹の狐は、うきしま神社から、稲荷の位をもらい、人をだましたり、作物をあらしたりしてはならないと、宝生の珠をもらっていた。

あさひのふたまたと金峰山のはこめんは、山の奥にいたが、なすのがはらのおさんは、人通りの多いところにいたので、人をだましては、もっている食べものをとってはたべていた。それが評判になった。

ある日、寺に来て法事をした人が、狐にだまされるから早く帰らなければという。

小僧は、おっさん(和尚)に、おさんから宝生の珠をとってくるからお金をくれといった。和尚はとめたが、八角帽子もかしてくれといってでかけた。

お金でてんぷらをかって、なすのが原をブラブラあるいていたが、おさんはでてこなかった。しばらくして日暮れになったら、向うから女が急いで歩いて来た。近づくのをよく見たら十七、八位の娘で、とてもよい着物を着ていた。すれちがうとき、互に一歩道をゆずったとき、おさんどこへ行くといった。娘は、おさんといえば狐のことだろう、おれはこのかげの村の平の娘である。それを狐とよぶのはととがめた。なら身分の高いもの、それがこの夕暮れただ一人で歩いている筈はないと考え、おさん、あまりかくさなくてもよいだろう。てんぷらでもくえとなげてやった。

そして八角帽子を出してかぶり、この帽子をかぶるとどんなものでも手に入るといった。おさんはほしくて、おれのたからものととりかえないかという。どんなたからかと聞くと宝生の珠だという。小僧は、そんなものをもらったってどうにもならないと、いらないふりをしたら、おさんはますますほしいというので、とりかえることにした。おさんは、使い方がわからないというため、村の店からまんじゅうをとってみせた。

おさんは、魚をたべたいと思い、刈和野の魚屋にいって、大きいサケにとびついたが、発見されマサカリをなげつけられ、腰をいためてにげ帰った。

一方小僧は、珠を本堂の奥にかざっておいた。その話が評判となり、他の二匹の狐にきこえていった。狐たちはおさんを訪れて、宝生の珠をとりかえすことになった。まず小僧の生まれた六郷のばあさんのところに行き、小僧の姿にばけていろいろ小僧についての話を聞き、今度は寺にいった。

ばあさんの姿をしていくと、和尚は今ごろくるわけがないと思ったが小僧がおれのばあさんだといい、宝生の珠をみせた。あまりみたくないような顔をしていたが、小僧がみれみれとすすめたので珠を手にとったらすぐ逃げだしてしまった。

小僧は自分の部屋に入ったきりでいろいろ考えたが、朝になるとまた金をもって宝生の珠をとってくるといってでかけた。まずお金で紙の烏帽子とひたたれを五十人分注文して帰り、壇家の人五十人をかしてくれといった。注文の品ができてきたら壇家の人五十人を集め、烏帽子ひたたれをつけさせ、とまれといったらとまり、平伏といったら顔をかくして伏し、たてといったらたち、もどれといったらもどってほしい。あとは酒をどんどんのませるからといい、自分はカゴに乗り隊をくんで、なすのが原にでかけた。おさんのいるあたりに来て、とまれといい、ついで、平伏といった。そしておさん、われはうきしま神社なり、きさまは宝生の珠を人間にとられたそうだが、みがきなおしてやるからこれへ出せといった。おさんは、はいといって珠を出したので、それをとり、一同にたてといい、ついでもどれといってもどった。4～5日たったら、噂さがひろがり、三匹の狐にきこえていったため、とりかえそうとそろってでかけた。

来年は殿様の百年祭にあたっていることがわかったので、よい馬にのり侍にばけて寺に行き門をどんどんたたいた。小僧がでたら、かみしもをつけた二人の侍が、殿様の百年の法事をするから五十人分の用意をしておけといって帰った。和尚は、来年の筈だが、殿様のことだからと準備することにした。小僧もあれは変だ、本当の侍ならちゃんと寺に入って挨拶する筈だと思った。

法事の日、小僧は二人のおぜんの間に火鉢をおいて、なんばん(とうがらし)の粉をかってまっていた。すると五十人の侍がやって来た。（二匹の狐がばけているもの）　そして仏様をおがんでおぜんについて飲み方がはじまった。小僧は酒をつぐたび火鉢になんばん粉をおとしたためえぶり出したが、狐どもはまっこう(香)だと思っていたがだんだん苦しくなり、咳をはじめた、小僧は和尚さんに戸をぜんぶ閉めるようにいい、どんどんえぶした。狐どもは珠をさがそうとしたが、見つからぬうち苦しくなり、天窓からにげてしまった。